

俺には年上の幼馴染がいる。彼の名は川本蓮也。^{かわもとれんや}俺はよく「蓮也くん」と呼んでいる。

俺より二歳年上の彼は、面倒見がよく、そのうえ格好良い憧れのお兄ちゃん的存在だった。

その憧れの気持ちはやがて恋心へと変わって、蓮也くんは俺の初恋の人になった。その想いは年月が経っても消えることはなく、俺は彼のことをずっと思い続けていた。だけど、いざその想いを伝えるとなると恥ずかしくてなかなか言い出すことができなかった。そして、何もできないまま蓮也くんは大学進学のために東京に出て行ってしまった。

あれから二年。蓮也くんと同じ大学に無事合格できた俺は、彼を追いかけて東京へと引っ越すことになった。住むのは勿論

彼と同じアパートで、その事を彼に話すととても喜んでいるようだった。

今日、俺はこれから住むアパートの内見のために東京に来ている。心ではそこのアパートに住むことは決めているのだが、念のため部屋を確認しておきたいというのと、何よりも蓮也くんに早く会いたいのだ。

どういうわけか、蓮也くんは一人暮らしを始めてから実家に帰ってくることはなかった。勿論電話やメッセージで連絡は取り合っていたのだが、直接姿を見せる事は一度も無かったのだ。それに関しては、蓮也くんの家族も、俺も、俺の家族もすごく心配している。だから、今日彼に会えるのをすごく楽しみにしている。二年ぶりに会う蓮也くんはどんな風になっているだろう

うか。高校生の時もイケメンだった蓮也くんだけど、大学生になってもっと格好良くなっているかもしれない。そして、あわよくばそんな蓮也くんと恋人同士になれたらなと、期待に胸を躍らせるのだった。

部屋の下見が終わった後は、早速蓮也くんの部屋へと向かう。今回、俺は彼の部屋に泊めてもらえることになっているのだ。彼とお泊りだなんて、子供の時以来だろうか。久しぶりに会えるだけでなく、同じ部屋で寝泊まりできるなんて想像するだけでワクワクしてしまう。

教えてくれた部屋の前まで行って、チャイムを鳴らそうとする。だが、俺はふと違和感を覚えた。

部屋の中から、何かが聞こえるのだ。

それは人の声のようにも聞こえた。でも、蓮也くんは一人暮らしのはずだから普通は聞こえるはずがないんだけど……。

音の正体を探るために耳を澄ませると、それはどうやら嬌声のようだった。

まるで女の人のような甘ったるくて、甲高い喘ぎ声が聞こえてくる。

俺は、性経験はないけれど、知識はそれなりにあるから分かってしまう。これはセックスだ。部屋の中では性行為が行われているのだ。

もしかして部屋を間違えてしまったかと思ったけれど、何度確認しても教えてもらった部屋番号と一致していた。

これはつまり、蓮也くんが部屋に女の人を連れ込んでいると
いうことだろうか。それもわざわざ、こんな時に。なんだかと
てもショックだった。そして、肚の底から怒りが込み上げてき
た。仮に部屋に連れ込むにしても、別に今日じゃなくたってい
いじゃないかと思う。もうプライバシーだとか、そういうのは
気にせずにドアホンを鳴らす。

「は、はい、ッ……！ ……もしかして、孝次^{たかつぐ}……ッ?! い、
いい……よ。鍵は開いて……っる……から、入って、くッ……
！！」

するとしばらくして返事があった。間違いなく蓮也くんだった。
俺はもうこの時点で、冷静でなくなっていた。だから、応
対した彼の声に変なことにも気づくことができなかったのだ。

少々乱暴に部屋のドアを開けると、そこには衝撃的な光景が広がっていた。俺が想像したよりも、ずっと。

ドアを開けてまず目に飛び込んできたのは、身体を重ねる二つの裸身だった。

てっきりそれは蓮也くんと、彼が連れ込んだ女の人なのかと思ったけれど、よく見るとそうではないことが分かった。

なんと女性のように甘い嬌声を上げていたのは、蓮也くん自身だったのだ。彼は裸になって見知らぬ男の上に跨って、そのペニスを咥え込みながら嬉しそうに善がっている。

以前はあんなにイケメンだった彼の痴態を目の当たりにした俺は、言葉を失ってしまった。

「ああっ……♡♡ あんっ♡♡……！ おちんぼ♡……しゅ

きい♡……奥まで、突かれるの♡……きもちいよお……♡♡」

そのうえ彼は卑猥な言葉を平然と使ってまで快楽を貪ろうとするのだから、俺にとっては到底信じられない光景であった。

彼は部屋に入ってきた俺に目をくれることなく、再びセックスに耽ろうとしているようだった。そのためか、俺の存在に触れたのは彼ではなく、蓮也くんのアナルを犯している人物——蓮也くんと同じくらいの歳の男——だった。男の雰囲気はまるでチンピラといった感じで、蓮也くんとは対照的だ。

「お前は……。そうか！ お前が、蓮也の言ってた幼馴染か！いきなりで驚いただろ？ どうだ、お前も混ぜてみるか？
気持ちいいぞ！」

この男はあろうことか俺をセックスに誘ったのである。答えはもちろんノーだ。こんな地獄のような狂宴に混ざる度胸はない。

「いえ、俺は……」

さっさとこんなところから立ち去って、今日はもうどこか別の場所に泊まろうかと思っていると、ふいに蓮也くんがこちらに意識を向けてきた。

「あっ♡♡……孝次う♡……いらっしやい♡♡ 孝次も、いっしょに♡……セックス、する♡？ きもちいよぉ……♡？」

なんと彼までもが俺をこの地獄に誘ってきたのだ。そんな彼の姿はとても煽情的で、まさしくメスだ。あの頃の面影は、も

うどこにもない。その事実に俺は大きなショックを受けてしまう。

だけど、それと同時に彼の痴態を好いものだと思っている自分もいた。なにせあんなに欲情して、乱れまくった想い人の姿が目の前にあるのだ。正直、男として興奮しない訳がなかった。

こんな風に相反する気持ちが心の中でせめぎあい、結果として俺は何も行動することはできなかったのだ。その間に蓮也くんは、葛藤している最中の俺の手を引っ張って部屋の中へと引き入れてしまったのだ。

「え？……ち、ちょ……っ?!」

「なんだか悩んでいるみたいだけどお♡……。セックスで、気持ちよくなって♡……。ぜんぶ、忘れちゃお♡……。？」

もう駄目だ。ここまで破壊力のある言葉で誘われてしまえば、俺にはもう抗うことはできない。ついに俺は流されるがままに、この地獄に参加することになったのである。

といっても、童貞である俺には参加を決めたところで自分から何かできるわけではなかった。ただ俺をリードしてくれている蓮也くんにされるがままだ。

彼は俺のスラックスに手を掛けると、それを脱がし始めた。その手付きは異様に慣れた様子で、彼の今までの経験を想像させられて、いっそう興奮してしまう。

「わ、わっ……！ 蓮也くん……?!」

「ずいぶん恥かしかってるねえ♡……。ふふ、可愛い♡……」

そうやって妖艶に俺を挿入する姿も以前の彼からは考えられないもので、彼はすっかり変わってしまったのだと改めて実感させられる。

「はあっ♡♡……。やっぱり……。孝次のおちんぼ♡、すごいでっか……。♡♡」

そうしてあれよあれよと脱がされた俺は、ついに俺自身のペニスを露わにってしまった。蓮也くんがあまりにもエロい所為で、そこはすっかり完勃起状態だ。

そしてそれを見つめる蓮也くんは、俺のいちもつ一物に釘付けといった具合で、既に完全なメス顔を晒していた。自分のペニスの大きさは今まであまり意識したことがなかったが、彼の様子を見る限りどうやらそれは相当大きなサイズのようなのだ。

「こんなにおっきなオスちんぽ♡……おいしそう……♡♡」

彼らはそう言ったかと思うと、いきなり俺のペニスを咥え始めた。

「っ……！！」

俺にとっては、フェラチオされるのはもちろん初めての経験である。その感覚を想像したことは無いわけではないが、まさか本物のソレがこんなにも気持ちのいいものだとは思わなかった。

「んっ♡……んんっ♡……きもひい♡……？」

「うん、すごく気持ちいいよ……。蓮也くん、っ……！」

そして、咥えている側の蓮也くんもまた気持ちよさそうな顔をしている。高校時代、学校中で評判になるほどのイケメンで、

端正な顔立ちをしていた彼が、今はその顔を歪めて嬉しそうに俺のペニスを頬張っている。その事実には俺は浅ましくも興奮してしまう。

フェラされ始めてしばらくした後、突然様子が変わった。

「んっ♡♡……！ あっ♡♡……！」

蓮也くんのフェラする動きが不規則になり、喘ぎも大きくなった。

一体どうしたのかと下を見ると、なんとさっきからずっと蓮也くんのアナルにペニスを挿入していた男が腰を突き上げ始めたのである。

「こいつはな、上の口と下の口の両方でチンポを咥えるのが大好きなんだよ。まったく、とんだ淫乱だぜ」

正直、さっきまで存在を忘れていたこの男の口ぶりは、まるで蓮也くんが何回もこんな風に上も下もペニスに犯されているみたいな言い方だった。もしそれが本当なら、彼はどれだけビッチなんだ……。

「あっ♡……！ んんっ……♡♡」

実際、騎乗位の体勢でアナルに男のペニスを挿入されて身体を揺らして快楽を享受しながら、俺のペニスをフェラしてさらなる快楽を得ようとする蓮也くんの姿は、男の言を裏付けるような淫乱ぶりだった。

さらにそれだけでなく、彼自身のペニスは完全に勃起しており、彼が興奮していることを明確に示していた。彼がイケメンということもあって、その大きさはそれなりだったが、それでも上

も下も犯されながら興奮しておっ立っているのだから、どちらかといえばメスという方がふさわしいだろう。

そんなメスの快楽を味わっている蓮也くんを見て、俺もさらに興奮してしまった。抑えが効かなくなって、もっと気持ち良くなろうとつい彼の喉奥まで突いてしまう。

「んん……っ♡♡！」

彼は最初こそ苦しげな顔をしていたが、すぐに気持ちよさそうな顔になった。イラマチオによって激しく突かれても感じているなんて、もしかしたら彼にはマゾヒストの才能があるのかもしれない。

俺は続けて自分本位に彼の喉奥めがけて腰を振ってしまう。その度に彼は悦んでいるような素振りを見せ、俺にはそれがと

んでもなくエロく見えてしまう。最初はあの蓮也くんが変わり果てていたことにショックを受けるばかりだったが、ここに来て新たな扉を開いてしまいそうだ。

「んっ♡♡……は、あっ……♡♡」

それにしても、彼の喉奥は締め付けが凄くて気持ちがいい。これはきっと“喉マンコ”と呼ばれるような名器なのだろう。そういうわけで、彼から与えられる刺激は童貞の俺にはかなり刺激の強いものであった。だから、正直俺は既にイキそうだった。

「蓮也くん……っ！ 俺……もう、出ちゃいそう……だからっ！」

ここまで彼を犯しておいて今更かもしれないが、それでも彼の口内に射精するのは流石に憚られた。だけど、彼は俺のペニ

スを咥え込んだまま離してくれそうもない。それどころか、彼は上目遣いになって“出していい”と言っているようにも見えた。

それならば、もう仕方が無いのかもしれない。

「ごめん蓮也くん……！ 出す、よっ……！ くッ……、イクッ……！！」

——ドクッ♡♡ドクッ♡♡ ドクッ♡♡ドクッ♡♡

「はあっ……、はあっ……」

こうして俺は、蓮也くんの口の中でイッてしまったのである。幼馴染にフェラをされて、口内射精をする。高校時代までは、まさかこんなことをする関係になるなんて露ほども思わなかった。

俺がこの状況に驚いている一方で、蓮也くんは平気な顔をしていた。

「孝次の、せーえき♡……おいしかった♡、よっ……！」

彼の口ぶりからして、きっと俺の精液を全部飲み干してしまったのだろう。そのうえ口の端に零れたザーメンも舌で舐め取るのだから、俺にはこのうえないほどエロく見えた。

だが、彼のエロさはそれだけではなかった。なんとイッたばかりの俺のペニスを再び咥え、舐め始めたのだ。

「んっ♡……、これで……綺麗に、なったかな♡」

所謂“お掃除フェラ”である。こんなことまでするなんて、彼は一体どれほどのビッチへと変貌してしまったのだろうか。

その証拠に彼はフェラするのを終えると、今度はチンピラ男

とのセックスに集中し始めた。

「ああんっ♡♡……おちんぼ♡、しゅきい……♡♡」

俺の目の前には、男の上に跨ってペニスをアナルに咥えながら、淫らに腰を振る蓮也くんの姿がある。

「はあっ♡♡……！ おくまで、ズボズボされるの♡……きもち、いい……♡♡」

ただ快楽を求めて男とのセックスに耽る彼の様子は、もうさっきまでの俺との行為を忘れているんじゃないかと思うほどだ。

その瞬間、ふいに俺の中に灰暗い欲望が生まれたような気がした。蓮也くんは俺のものはずなのに、こんな粗野な男なんかに取られて悔しいと。

だが、小心者の俺にはどうすることもできず、結局黙っているほかなかった。

「ああっ♡♡……オスちんぽ♡♡、おくまで……とどいて、りゅ……っ♡♡」

それでも、俺も男である以上、目の前で好きな人の痴態を見せられれば反応してしまうもので、さっきイッたばかりの俺のペニスは再び勃起していた。

「やっ……♡♡、はげし……っ♡♡！　もっとお♡……おくまで、ついてえ……♡♡」

ちょうどその時である。彼のメスのような喘ぎ声がいっそう
激しさを増したのは。これは恐らく、二人のセックスに本格的
にスパートが掛かったのだろう。

男の激しい突きに合わせるように上下に揺れる蓮也くんは、
とても煽情的だ。もはやここまで来ると獣の交尾のようなセッ
クスだ。今この瞬間、二人はオスとメスでしかない。

「あっ♡♡、ああんっ……♡♡！ イッちゃう♡、イッちゃう
……よお♡♡ あああああっ……♡♡♡！！」

そして、蓮也くんは絶頂を迎えた。だが、蓮也くんのペニス
を見ても我慢汁が大量に分泌されているだけで特に射精はし
ていない。ということは、きっと彼はメスイキをしたのである。

「は、あっ……♡♡ はあ……っ♡♡ ナカでイクの♡……す

ごい、きもちい♡♡……」

そのうえ彼の様子からして、メスイキをするのも初めてというわけではないようだ。まったく、蓮也くんはどこまでエロい姿を見せつけられれば気が済むのだろうか。

それを見た俺のペニスは、もう完全勃起状態になっていた。

「孝次……♡ 孝次のココ、まだ勃ってるね♡……」

いつのまにか、蓮也くんが俺のすぐ側まで近づいたようだった。チンピラ男とのセックスは既に終わったのだろう。

すっかり勃起してしまった俺のペニスは——あとでこっそりオナニーをして発散しようか。だが、彼から出た言葉は意外なものだった。

「孝次のデカちんぽ♡……俺のおまんこに、挿入^いれてみない♡♡……？」

まさかの誘いだった。

てっきり蓮也さんとチンピラ男とのセックスを、指を咥えて見ているしかないと思っていたから、まさか俺ともセックスしてくれるなんて思ってもみなかった。

それにしても、よくそんな体力があるなと思ってしまう。少なくとも俺がこの部屋を訪れてからはずっとセックスしていて体力を消耗している筈なのに、全く疲れている気配がないの

だ。ふと昔を思い出せば、高校時代の蓮也くんはバレー部に所属していて、エースになるほど優秀だった。そのうえ身体も鍛えていて、すごく格好良かった。おまけに女子からの人気も相応だった。だが、今の彼はまるで変わってしまった。でもまあ、俺だってそのギャップに興奮している気持ちもあるのだから、人のことをあれこれと言える立場ではないだろう。

あの頃の蓮也くんはもう居ない。そう割り切ろうとしても、こんな風に昔の面影が垣間見えることもあるのだから、どう整理をつければいいのか分からない。でも、どの蓮也くんも蓮也くんであることに変わりはないだろう。好きな人であるならば、どんな様子になっても変わらず愛し続けるべきではないだろうか。たとえそれが片恋で終わるとしても。

「挿入りたい……。俺も、蓮也くんの……。おまんこに、挿入れたい……。！」

意を決して、俺は蓮也くんの誘いに乗る事にしたのである。とどのつまり、それは性欲ゆえの決断なのだろう。だが、つまらないプライドを拗らせて好きな人とセックスできるチャンスを見すみす逃すよりは遥かにマシだと思ったのだ。

「りょーかい♡ えーと、ゴムは……。もう無くなっちゃったか。まあ孝次なら……。いいか。孝次……。特別に俺のおまんこにナマでハメハメ♡……。してもいいよ……。♡♡」

それはまさしく殺し文句だった。ここまで直接的な誘いは俺には少々刺激が強すぎる。でも、確かに周りには使用済みのコンドームがたくさん転がっており、その全てをチンピラ男との

セックスで消費してしまったのだろう。偶然の結果かもしれないが、俺はチンピラ男とは違って蓮也さんとナマでセックスできるのである。俺は密に優越感に浸った。

「それじゃあ……挿入れるね♡♡」

蓮也さんに言われるがまま床に仰向けになった俺は、彼に跨られている。これは騎乗位でのセックスなのだろう。

「ああっ♡……ああん……っ♡♡！ 孝次の……デカちゃんぽ

♡♡ ^{はい}挿入って、くりゅ♡♡……」

「……っ！！」

俺の上に跨った彼が、俺のペニスをアナルに呑み込む姿がはっきりと見える。それはまさしく“絶景”だ。彼の程よく筋肉が付いた身体が乱れ、腰をくねらせる姿は見ものである。

「んんっ……♡♡ は、あ……っ♡♡ ぜんぶ、挿入った♡♡……はあっ……♡♡」

彼は俺のペニスの中ほどまで腰を沈め、その後は重力の流れに任せて一気に根元まで挿入した。

「くッ……！！ 締め付け、ヤバい……！！」

それによって俺が感じる刺激は凄まじく、一瞬で持っていかれそうになるのを必死に堪える。

彼はこれまで、そしてさっきも、何回も男のペニスを咥え込んでいるはずなのに、ナカの締め付けは緩みを感じなかった。

それも彼がここまでのビッチになった一因なのかもしれない。

「ふふ……♡　きれいな……童貞ちんぽ♡♡　俺、の……汚れた、メス穴で♡……犯してる……みたい……ッ♡♡！」

彼は妖艶な笑みを浮かべながら、俺のペニスの味を堪能しているようだった。

「ああっ……♡♡　イイ、ところ♡……コリコリ当たって、きもちい……♡♡　あ、あん……っ♡♡」

「蓮……也、くん……ッ！！」

彼は自ら腰をくねらせる度に淫らな甘い声が出るようだった。その姿はまさしく娼婦といった具合で、この場の空気をと

ことんまで淫靡なものに変貌させていた。俺もその空気に当てられたのか、はたまた彼がグラインドすることによって生じるナカの刺激に感じてしまったのか、とにかく限界を迎えそうになっていた。だが、ここで早々にイッてしまうのも却って恥ずかしい。少なくとも好きな人の前では格好良い姿を見せたいという僅かばかりの矜持によって必死に耐えるのであった。

「はあ……っ♡♡ んんっ……♡♡ 孝次……も、きもちい♡……？」

「うん……。蓮也くんのナカ、最高にトロトロで……気持ちいいよ……」

彼にそんな事を尋ねられたならば、首肯するほかないだろう。

それだけ彼のアナルの感触は最高だった。これぞ“名器”という

ヤツなのかもしれない。尤も、これは俺が童貞である故の評価なのかもしれないが、彼の秘所がかなりの締まり具合であることは確かだろう。

「そっか……♡♡　うれしいな……♡♡　それじゃあ、褒めてくれたお礼に……俺のおまんこ♡……孝次がもっと突いても……いいよ♡♡……」

まさかの展開だった。俺には些か刺激が強すぎるかもしれないが、こんなに淫らに誘われたら断ることもできないのである。結局己の欲に負けた俺は、彼にサポートされるがまま自ら動くことにしたのである。それに、俺自身によって彼のエロティックな姿をもっと暴きたいという願望もあった。

「あああ♡♡……ああ、んっ……♡♡ おまんこ♡……おく、
まで……ズポズポされて、りゅ……♡♡」

「蓮也くん……！ 蓮也くんッ……！！」

もっと快楽を得たい、もっと彼を乱れさせたい、そういう気
持ちから必死に腰を浮かせて最奥を突き上げる。正直、そんな
必死になって腰を振る姿は情けないのかもしれない。だが、今
の俺にはそんなことは些末事だった。ただ重要なのは、俺たち
が気持ちよくなれること。その一点のみだ。

これまでも響いていた肉と肉のぶつかり合う音が、さらに激
しさを増す。俺はもう、イク寸前となり、蓮也くんも一層乱れ、
その顔は完全に蕩けきっていた。

「は、あ……っ！ もう、イキそう……！ 蓮也くん、射精す
よッ……！」

「ああんっ……♡♡ 種付け……してえ……♡♡！ 孝次の
せーし、ナカに射精してえ……♡♡！」

——ドクッ♡♡ドクッ♡♡ ドクッ♡♡ドクッ♡♡

俺の放った精液が蓮也くんのナカに注がれる。彼のアナルは
俺のペニスをぎゅうぎゅうと締め付けて離さない。それはまるで俺の精子を極限まで搾り取ろうとしているように感じられた。

「ああ……っ♡♡ ふう……っ♡♡」

俺がイットのと同時に彼もイットようで、彼のペニスからは
どろどろの精液が垂れ流されていた。そして、その余韻からか、

彼はだいぶ肌を上気させ、呼吸を荒くしていた。その姿がまた煽情的で、彼は天性のメスなのかもしれないと改めて思うのだった。

一方の俺はというと、初めてのセックス、そのうえ好きな人である蓮也くん相手に生ハメするという行為を経験して、歓喜し、その悦びに打ち震えていた。童貞の貧相な想像力で、セックスによって至上の快楽がもたらされるのだと夢想したこともあったが、現実が夢想をいとも容易く凌駕した。

さて人間というのは欲深い生き物で、俺もまた例に漏れずこの究極の気持ち良さをもっと味わいたいと思い始めたのである。俺はそれからすぐに蓮也くんにもう一回しようと申し出た。

射精の余韻が収まった彼もまた乗り気だったようで、第二回戦はすぐに始まった。その後はあのチンピラ男も混じりつつ、三人でただひたすらセックスに興じたのであった。

そんな淫らな交歓が終わりを迎える頃にはすっかり日も暮れていた。俺が蓮也くんの部屋を訪れたのは午前中の事であったから、随分と長い時間を費やしたものである。

正直、俺は開いてはいけない扉をこじ開けてしまったのかもしれない。蓮也くんのナカの感触、そして彼の乱れた姿はもう忘れることなんてできない。彼との行為は一度ハマったら抜け出せない、強烈な劇薬のようなものなのだ。

「ごめん！ 孝次には本当に申し訳ないと思ってる！」

夜の帳がすっかり降りた頃、ワンルームの手狭なアパートの室内には俺と蓮也くんの二人だけ。チンピラ男は既に帰り、さっきまで散々響いていた肉欲のぶつかり合う音は疾うに止んでいる。辺りには静寂が漂う中、突然の謝罪によってこの静けさを破ったのは蓮也くんだった。

「お前をあんな事に巻き込んですまない。信じてもらえないかもしれないが、俺もまさかあんな流れになるとは思ってたんだ……」

罰の悪そうな顔をして俺に頭を下げる蓮也くん。

でも、俺にとってはそんな謝罪なんて正直どうでも良い。ただ、どうしてこうなったのか、その真相が知りたいだけだ。

「……別に俺は良いよ。でも、蓮也くんがなんであんな風になったのか。それだけは教えて？ 答えられる範囲でいいから…
…」

そう、俺が知りたいのは彼が何故あんな淫乱^{ビッチ}に変貌してしまったのか、ということについてである。少なくとも、高校生の時の彼は男のモノを咥え込んで善がっている姿なんて微塵も想像できないほど格好良かったのに。

「それは……。いや、分かった。ちゃんと話すよ。孝次には、いずれ話そうと思ってたことだし……」

こうして、蓮也くんは居住まいを正し、この二年の間に起こった出来事について語り出したのであった。

彼曰く、大学に入学してすぐ、同じ部活——彼は高校時代と同じくバレー部に所属していた——の先輩に男の味を覚えさせられてしまったのだという。その先輩は常に遊び歩いているような人で、複数の男女と関係を持っていたという。そして、アングラ的な“そういう”場所や集まりにも詳しかった。蓮也くんは偶々その集まりに誘われてしまったのだ。そこで先輩を含む幾人もの男に代わる代わる犯され、メスの快楽を植え付けられたのだそうだ。

その後も蓮也くんはそうした集まりに参加させられ、最初は嫌がっていたのだが、次第に自分から参加するようになったという。やがて、すっかり男狂いになってしまった蓮也くんは、先輩とは関係なく毎日男を誘ってセックスに耽るようになり、結

局部活も辞めてしまった。現在、その先輩は大学を中退してしまい音信不通となったが、蓮也くんは変わらず男たちとのセックスを愉しむビッチであり続け、現在へと至るのだという。

「これが……俺が経験した事。どう？ 笑えるでしょ？」

そうやって軽々しく言う彼に、俺は何の言葉も返すことができなかった。

あまりに衝撃的で重苦しい事実、どう反応すればいいのか分からないのだ。でも、彼に憐憫の情を抱くのは違う気がする。これは彼と長年の付き合いがあるから分かることなのだが、蓮也くんが俺に話してくれたのはきっと同情を誘うためではないだろう。

だから、言うべきはただひとつ……。

「……ごめん。俺には笑えない。でも、蓮也くんに慰めの言葉

をかけることもしない」

「孝次……？」

毅然とした態度で言い放った俺に、蓮也くんはすっかり面食らったかのようだ。

「ただ俺が言いたいのは、蓮也くんがどう変わったとしても俺は受け入れるってことだけだ……」

受け入れると言っても、所詮は綺麗事に過ぎないだろう。だけど、今の蓮也くんには綺麗事だろうが、理想論だろうが、救いになるのだと俺は確信しているのだ。

「蓮也くんが好きでやっているのなら、俺は止めない。でも、もし嫌なことがあって蓮也くんがもっと傷ついてしまったの

なら、いつでも俺を頼ってくれてもいい……。否、むしろ頼^{いや}ってほしい。俺はどんな時でもウェルカムだから……」

彼に届くよう、必死に言葉を重ねる。人生経験の浅い俺の言葉なんて、紙切れのように薄っぺらいかもしれないけれど、今の俺に出来る事はこれくらいしか無いのだから、どうか――。

「……いいの？ 本当に受け入れてくれる？ こんな……汚れた俺でも？」

すると、俺の祈りが通じたかは定かではないが、蓮也くんは目に涙を浮かべ、まるで赦しを請うように尋ねてきた。

「……ああ、勿論。俺はいつだって蓮也くんの味方だよ」

「そっか……。よかった……。……ありがとう。こんな俺を受け入れてくれて……」

俺が言葉を返すと、彼は途端に安堵したようだった。

でも、まだ話は終わっていないのだ——。

「だけど、俺は怒ってるよ……」

「え？」

そう、俺は怒りを覚えている。もちろん蓮也くんにはではない。

彼を散々手籠めにした男たちである。それは義憤の気持ちも

少しはあるけれど、何よりも「好きな人を取られてしまった」

という気持ちが強かった。だから、さほど高尚な想いではない

のだが、怒りを覚えていることは確かだ。

「蓮也くんに対してじゃないけどね。蓮也くんを犯した悪い人

たちに対してだよ……」

「孝次……。その気持ちはありがたいけど、別に俺はいいよ…
…」

「いや、そうじゃないんだ。俺が抱いている気持ちはそんな素晴らしいものじゃない……。あいつらに蓮也くんを嫉妬しているだけだよ。俺は……蓮也くんのことを、好きだから——」

場の勢いに任せる形で、長年自分が秘めていた想いを吐露する。正直、俺にはこれで十分だろう。結局、俺は彼に浅ましい想いを抱いていて、本質的にはあの男たちと変わらないのだから。俺が蓮也くんと結ばれる資格なんて、とうに失われてしまったのだ。

「そう、だったんだ……。驚いた……。ごめんな、今まで気づかなくて。でも、今の俺はお前の想いには応えることはできない。悪いな……」

やっぱり、か。こうなることは予想していたのだが、いざ直接告げられるとキツイものがある。

「いや、俺こそごめんね。だけど、これだけは聞いてほしい。……もう一度、蓮也くんを抱きたい。心よりも先に身体から、なんて不誠実かもしれないけど、俺には我慢できないんだ。他の男たちが蓮也くんの綺麗な身体を汚しまくったんだと思うと、気が狂いそうになる……」

図々しい要望をしているという自覚はあるのだが、こうでもしないと諦めるなんて事は絶対にできない。

「ダメだ……。キレイなお前が、俺の汚れた身体にこれ以上触れるのは……ダメだ」

案の定、断られてしまう。それならば、こちらもこうするか——ないだろう。

「た、孝次……?!」

俺の正面に座っている蓮也くんの後ろに回り込み、抱きしめながら耳元で囁く。

「俺の童貞を奪っておいて、今更それを言うの……？　お願い、他のヤツに触られたところ、全部上書きさせて……」

「ひゃっ♡……！　耳、弱いからぁ……♡」

「あっはは。可愛い反応。さっきまではあんなにエッチだったのに、今度は純情ぶるんだ……」

好感触が得られたことに、思わず俺は気を良くする。

「あいつらに触られたトコロはどこ？ それとも二年間のうちに全てに触られ尽くしたのかな……？」

「やっ……♡♡ そこ、ダメっ……♡ ああっ♡……！」

そう言って彼の首筋に舌を這わせると、甘い声を上げるものだから余計に興が乗ってしまう。

「蓮也くん……すごく気持ちよさそうだね……」

「それ、は……孝次が、変なトコ……ばっか、触って、くるから——ッ！！」

「うおッ……！」

俺が調子に乗って蓮也くんの身体を刺激していると、流石の彼も耐えかねたようでからがら俺の腕から抜け出し、距離を取られてしまった。

「孝次……。こんなの、ダメだよ……。これ以上されたら……後戻りできなくなるっ！」

どうやら蓮也くんの心中では、俺ともっと触れ合いたいという欲望と、俺とは距離を置くべきだという自制心がせめぎ合っている。そういう風に感じられた。

「残念だけど、もう遅いよ。俺はもう蓮也くんの虜になってしまった。蓮也くんだって、それを分かってるんじゃない？」

「だから、だよ。正直、俺は孝次にもっと触られたい。でも、同時にこんな俺が孝次と触れ合うべきではないとも思ってる

んだ。お前にはもっとふさわしい——綺麗な人が居るはずだ。

だから、俺とお前がこんな事をするべきじゃない……」

でも、俺は少し拒絶された程度で抑えられないほど強い情欲を
彼に抱いているのだ。

「蓮也くんは綺麗だよ。汚れてなんかない。それでも納得でき
ないのなら——手酷く抱いてあげようか？ 優しくされなけ
れば、まだ気持ちの整理がつくよね？」

「べ、別にそういうことじゃ……。それに孝次は優しいから、
酷くなんてできないだろ？」

それは——違う。俺は蓮也くんの言うような優しい人間では
ないのだ。彼は俺の提案が彼の事を思っていることだと理解して
いるようだが、実際には俺自身のことしか考えられていないの

だ。ただ彼への溢れ出る愛情——否、肉欲をぶつけたいだけ。

むしろ最低な人間だろう。

「じゃあ、今日はこのまま何もしない……？」

「そ、それは……。お前に言われて、すっかりそういう気分になったし……」

だから、こんな駆け引きみたいなことも平気で出来るのだ。

俺があえて“引いた”ことで揺らいた彼の心を見逃さず、そのまま捕らえてしまう。

「だったら、これからやるってことでいいよね？」

「あのなあ……。もっと情緒とかムードってものをなあ……」

「俺は手酷く抱くって言ったよね？ それならムードも何も要らないんじゃない……？」

「それは、そうだけど……っ！」

たぶん蓮也くんは今、すごく余裕が無いのだと思う。俺の童貞を奪った時とはまるで違う様子。きっと、俺が彼に好意を伝えた時からそうなってしまったのだろう。もしかしたら、彼はこれまで“愛し合うセックス”というものを経験したことがないのかもしれない。だから、セックス自体には慣れていても、そこに愛が絡むと途端に余裕をなくしてしまうのだろう。

「まずは……さっきの続きを、しょうか？」

そういうわけで、俺は服を裸身が露わになった蓮也くんを押し倒して、彼の肢体を舐^{ねぶ}っているのだった。

「やっ……♡♡！ ダ、ダメ……ッ♡！ あ♡……あんっ

♡♡……！」

「俺の舌で乱れる蓮也くん……。ああ、すごく可愛いよ……」

「なんか……お前、変態っぽい……ん、ああっ♡♡……！」

俺は彼の抗議の声を黙殺し、さらにコトを進めることにした。

今度は乳首に舌を這わせ、その突起を味わうのであった。彼

の乳首はこれまで開発された所為か、ぷっくりと膨れ上がった

完全な勃起乳首だった。

「蓮也くんの乳首、すごい勃ってる……。これじゃあまるで女

の子みたいだね……」

「ああっ……♡♡ 俺、の……メス乳首♡ 舐められてる……

うっ♡♡！」

俺の言葉責めが効いたかどうかは定かではないが、乳首を刺
激し始めたことで彼は余計に乱れ、甘い喘ぎをひっきりなしに
上げるようになった。

俺は蓮也くん覆いかぶさる形で一つの乳首を舐め、片方の
手でもう一つを捏ねくり回している。さらにもう片方の手は彼
の胸筋からお腹の方へと向かって、さわさわと厭らしい手付き
で触っているのだった。

彼は乳頭こそあからさまに隆起させているが、一方で胸自体
はさほど膨らんでいる訳ではなかった。しっかりした胸筋こそ
あれど、身体はいたって細身のままだ。またその下に目を
向けると、腹筋が綺麗に割れており、まさしく“細マッチョ”た

る彼らしい肉体美であった。だからこそそんな肉体の中でひときわ目立つメス乳首が、却って彼の淫らさを強調しているのだ。

「でも……乳首は女の子みたいなのに、腹筋とかはすごく男らしくてイケメンだよな……。蓮也くんはオスなの、それともメスなの……？」

ただ確認するためだけの質問。彼が何と答えるかは分かりきっているはずなのに、あえて問うてみる。

「……メス、だよ♡ 俺は乳首をこんなに勃たせて……舐められただけで感じちゃうメスだ♡」

案の定な答だった。それならば、メス堕ち済みの彼の為にも俺は頑張らなきゃいけないな……。

「そっか……。じゃあ、蓮也くんのココはクリちんぽな訳だ…
…。すごい愛液でびしゃびしゃ……。やっぱり蓮也くんは淫乱
だね……」

そう言いながら、彼のクリちんぽ——もといペニスを握る。
そこは俺の愛撫で感じたのか、愛液——先走り汁ですっかり濡
れそぼっていた。

「は……っ♡♡ はあっ♡♡……！ ちくびとクリちんぽ
♡♡……きもちい♡♡ あっ、ああんっ……♡♡！」

やはり彼のペニスは随分と立派なサイズで、特に今はそれが
完全に勃起して腹まで届こうかという程の大きさになっていた。
た。まさしくイケメンな彼に似つかわしいペニスだが、あい

く彼は既にメスになってしまった。すなわち、ソレはあくまで

特大サイズのクリトリスというべきモノなのだ。

「蓮也くんのデカクリ……、まだ握っただけなのにもっとビン

ビンになったね……。おまけに愛液だっていっぱい出てる……。

そんなに気持ちいいの……？」

「だってえ♡♡……！ 孝次に触られる、の……♡♡ 好き、

だからあ……♡♡！」

俺に触られるのが好き、だなんて嬉しいことを言ってくれる

ものだ。この快楽に揉まれて、蓮也くんも本音がつい出てしま

ったのだったら良いなと思う。

それから俺は蓮也くんに刺激を与え続ける。乳首の突起を

摘まんだり爪先で弾いたり、または彼のペニスを扱いたりふわ

ふわの玉を揉みしだいたりしている。彼はその度にエッチな声で喘ぐものだから、思わずこちらも反応してしまう。

「う……んっ♡♡……！ あああっ……♡♡ もう、イキそっ……♡♡！」

「イッていいよ……！ 本能のままに思いっきり射精^だしちゃえ！」

「ああああっ♡♡……！」

——ドピュ♡♡ドピュ♡♡ ビュルル♡♡♡

蓮也くんのペニスからはドロドロの精液が放たれ、彼はイッたのだ。放たれた精は彼の腹部にぶっかけられ、射精の余韻を感じて顔を上気させながら肩で息をしているのと相まって、とてつもなくエロく見えてしまう。

「あーあ、せっかくイケメンオス精子をいっぱいびゅー♡びゅー♡ってしたのに全部セルフぶっかけしちゃうなんて勿体無いな一。でも、蓮也くんはメスだからむしろその方がふさわしいのかな。じゃあ、オスイキをした次はメスイキをしなきゃだね……」

「ちょっ……待っ……！ やあっ……♡♡！ まだ、イッたばっか……♡♡ ああ、んっ♡♡……！」

俺は彼を散々煽った後、彼の両の乳首をひときわ強く摘まみ上げた。普通ならば痛みを感じるだけだと思うが、ソコもすっかり開発済みの彼にとってはそうではなかったが、大きな快楽に身悶えているようである。

「ちく、び……よわい、から……ッ♡♡！ きもち、よすぎて
……また、イッちゃう……♡♡！」

瞬間。彼の身体が少し震えたかと思えば、これまで以上の蕩
け顔へと変わった。

「はああ……っ♡♡ ああああっ♡♡……メスアクメするの、
しゅきい……♡♡」

俺が与えた刺激によって、メスイキをしたのである。射精し
てからすぐのことであった。彼がこんな風にイクのはきっと何
度も経験して慣れたことなのだろうけれど、それでもかつてな
い程のトロ顔を晒していて、それを見た俺も滾ってしまう。

蓮也くんのこんなにも淫らにイク姿を見て、そろそろ俺も耐
えられそうになんてきた。初めに「手酷く抱く」と言った

ことだし、もう少し強引になってもいいんじゃないかと思うのだ。

「メスイキお疲れ様、蓮也くん。可愛いよ……。それで、蓮也くんのココ……寂しいんじゃない？……」

そういうわけで、俺は彼のアナルに指を伸ばしたのであった。

「あっ♡♡……、あああんっ……♡♡ おまんこ♡……ズポズポされるの、きもちい……♡♡」

まずは指を二本程度、軽く挿入する。そして内壁を擦るように動かすと、彼はその刺激にますます感じているということが見てとれた。

「ふふっ……。蓮也くんのおまんこ、俺の指に吸い付いてなかなか離してくれないね。……そんなに欲しかったの？」

「……んんっ♡♡ ゆびだけじゃ、たりない……からぁ♡♡

はやく、孝次の……おちんぼ♡、ちょーだい……♡♡」

「蓮也くんは随分と性急なんだね……。エッチな言葉で俺に媚
を売るぐらい、そんなにおちんぼが好きなんだ……。やっぱり
蓮也くんはとんでもない淫乱だ……」

そんな俺の言葉責めを受けてか、彼のアナルの締め付けは余
計にキツくなった。満足してはいなくとも、しっかり感じてい
るようである。

ただ俺としても、あまりに焦らすのは本意ではないため、指
の本数を増やし、さらに奥へと押し進めることにした。すると、
何やら違和感を覚える感触があった。ナカが濡れているのであ
る。まさか本物のヴァギナの如く愛液で濡れている訳でもない

し、腸液が分泌されたという訳でもないだろう。一体どういうことかと思案していると、ふと先刻のことが思い出された。これは俺が放った精液だ。それがまだ濡れたまま残っているのだ。

これなら話は早い。ここまで濡れているのだから、もはやこれ以上指で解すことも、ローションを潤滑剤とすることもないだろう。早速ここまでの彼の痴態を前にしてすっかりいきり立っている俺自身を解放することにした。

パンツの前を捻げ、下着の内からペニスを取り出す。それは脈打ち、バキバキの完勃起状態となっていた。我ながら非常に興奮していることがよく分かる。でも、それもこれも蓮也くんがこんなにもエロいのが悪いのだ。

「デカイ……オスちんぽ♡♡　すごい……♡♡」

そんな俺のペニスを見た蓮也くんは、やはりというべきか恍惚とした表情でそのデカブツに釘付けになっていた。今日まで自身のペニスの大きさなどあまり気にしたことはなかったが、蓮也くんがここまで喜んでくれるのなら大きいモノを持って生まれて良かったと実感する。

「蓮也くん、お望み通りもう挿入^いれるよ……。蓮也くんのおまんこ、俺が中出しした分でびしょびしょになってたから……。大丈夫だよね……？」

「いい、から……っ♡♡ はやく……挿入れてえ……♡♡！
はやく、孝次の優秀オスちんぽ♡♡ 俺のメスおまんこにぶち込んでえ……♡♡！」

彼はもう待ちきれないといった様子で、俺のペニスを咥え込むことを切望している。一方の俺も、蓮也くんの“煽り”にもう堪えられなくなっていた。

いきなりアナルの奥深いところまでペニスを挿入する。些か性急過ぎるやもしれないが、そもそも俺は今日まで童貞だったのだから仕方が無いだろう。

「ああああっ♡♡……おく、まで……♡♡　あああっ♡♡……うんんっ♡♡……はげしっ……♡♡」

突然の激しい衝撃に驚いた様子の蓮也くん。されど、それはすぐに快樂へと変換されたようでより一層高く啼いている。

「く……ッ！！」

その所為かは分からぬが、アナルの締め付けも先程までと比べてかなりキツくなり、油断するとすぐにイッてしまいそうだ。

「はあ……っ♡♡ はあっ♡♡……俺、のおまんこに……♡♡
孝次のおっきいちゃんぽが……^{はい}挿入ってる……♡♡ きもちい
……♡♡」

しばらくはあまり腰を動かすこともできなかったが、だんだん慣れてきてお互いに少し余裕が生じてきた。その状態で思うのは、やはり蓮也くんが魔性の魅力を有しているということだろう。彼は基本的に格好良い男なのだが、今はこうしてメスの如く俺に媚びている。そのギャップがとてつもなくそそられるのだった。格好良いイケメンを凌辱しているという下卑た状況認識が俺をさらに興奮させる。

「蓮也くん……、もっと激しく動くよ……！」

少しの間落ち着いた後、俺は彼のナカの最奥までより激しく腰を打ち付け始めた。

「あああああ……っ♡♡♡ いっぱい、突かれてるっ……♡♡

ああ、んっ♡♡……」

緩やかに突き上げた後に、激しく奥の奥まで貫く。この緩急のついた流れには、蓮也くんと雖も翻弄されているようだった。

俺はそんな彼の様子に気を良くし、さらに強くナカを突き上げるのだった。

「やあっ……♡♡ らめえ……♡♡……イツちゃう、よお……

♡♡ あんっ……♡♡」

奥を突く度に、辺りにはパンパンと肉のぶつかり合う音が響き、彼も淫らに喘ぐ。俺たちがしているのはただのセックスではなく、もはや獣の交尾のようであった。

「ふっ……、くっ……！ 締め付け、ヤバイ……！ そろそろ、イキそ……っ！」

「俺、も……イキそう……♡♡ デカちんぽ、に……突かれながら、メスアクメ♡……きめちゃうう♡♡！」

「蓮也くん……ッ！ 射^だ精すよッ……！！ くうう……っ！！」

「ああああんんっ……♡♡♡！」

——ドブッ♡♡ドブッ♡♡ ドブッ♡♡ドブッ♡♡

こうして、俺たちは同時に達したのであった。俺は蓮也くんのアナルの奥に濃い精液を注ぎ込み、蓮也くんはメスイキをした。

まだ恋人になってもいないのにセックスをするなんて、それは歪な関係かもしれない。俺は蓮也くんを感じられて、俺の手で乱れさせることができるこの行為に充足感を覚えたのだった。

今日だけで俺たちは二度もセックスをした。否、それだけではない。蓮也くんが淫乱なビッチへと変貌したという事実、そしてそこに至るまでの経緯も知った。本当に今日はいろいろなことがあった。

だけど、俺が蓮也くんと距離を置くということはない。俺はやはり彼の全てを受け入れるつもりだ。それがある意味で傲慢なことだという自覚はある。でも、それで蓮也くんが救われるのなら、俺は何だって構わない。

これからの彼との関係は少々ぎこちないものになるかもしれないが、それは今どうこう出来るものでもないだろう。俺が蓮也くんと同じアパートで暮らし始めるのはもう少し先のこと。事態が動くのは、それからのことだ。